

# 学会だより No. 80

2004年10月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3801 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788

## 第61回哲学会大会のお知らせ

今秋は下記の要領で第61回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえ  
ご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2004年10月23日（土） 10：00～16：45

会場：上智大学7号館14階特別会議室

## プログラム

研究発表 10：00～12：00

角田佑一（本学博士後期課程）

清沢満之『純正哲学』における「現実性」理解と関係論

ロツェ『形而上学』の仏教哲学的解釈

駒沢幸三郎（本学博士後期課程）

ホワイトヘッド『過程と実在』の構造 把握理論を中心として

休憩

総会 13：00～13：20

シンポジウム 13：25～15：35

テーマ：「古代ギリシアはいかに生きるか？」

提題者：土橋茂樹（中央大教授）

森 一郎（東京女子大助教授）

塩川千夏（成蹊高校教諭）

司 会：荻野弘之（本学哲学科教授）

講演 15：45～16：45

クラウス・リーゼンファー（本学哲学科教授）

学知の根拠・意義・目標 フィヒテにおける学者論の発展

懇親会 17：00～19：00

会場：上智会館4階第3会議室

会費：3,000円

## シンポジウム：「古代ギリシアはいかに生きるか？」

秋冷と共に、アテネ・オリンピックの興奮も一段落というところ。今回のシンポジウムでは、個別著作の内在的な解釈を並べてみせる「専門家」のコンクールといった学会の定石とはやや趣をかえて、古代哲学の基本的なモチーフが、21世紀の知的状況の文脈でいかなる転位と変奏を響かせるのか、主として影響作用史的な観点から、友愛、対話、都市国家といった主題を中心に、幅広く諸問題を考えてみたい。

(記：司会 荻野弘之(本学哲学科教授))

\*

### 提題要旨

#### 「フィリアとスタシス(友愛と内戦)」

土橋茂樹(中央大教授)

1. 慢性の重度意識障害状態にある患者はかつて「植物人間」と呼び慣わされていた(今ではそうした差別的な表現を避け、代わりに「植物状態患者」などと呼ばれている)。「人間として」分別(ロゴス)ある高度な精神活動を行い得ない、とりわけ言語を介した意思疎通が不可能な「かつて人間であった生物」を「人間」としてではなく「植物」とみなすその残酷な呼称の起源は、少なくとも古代ギリシアのアリストテレスによって構築された人間能力のヒエラルキーにまで遡ることができるだろう。彼は、栄養摂取および生殖を担う生命機能をあたかも植物に固有であるかのように人間としての生から排除しつつ、同時にそれなしでは一時たりとも生存し得ない必須条件として人間の生に組み込みもしたのである。

2. この事情はそっくりポリスのありように類比できるだろう。当時、アテナイのようなポリスにあって、完全な人間とはみなされることのなかった女性や子どもたちに固有な領域であった「家」は、人々が単に生きるために必須の(生殖を含む)生産と消費を担わされ、私秘的な、いわば剥き出しの生の領域として、言論による政治活動の場であったポリス共同体という公的な場面からは絶えず隠蔽され排除されつつ、同時に全一的なポリスの生には必須の基盤として構造化されてもいたのである。

3. しかし、こうしたポリスにおける剥き出しの生の排除 包摂構造を内から壊すもの、それが「内戦(スタシス)」であった。「家」という公的な法の及ばぬあくまで私秘的な領域にあって、血縁による親愛(フィリア)関係にある者いわば身内同士が敵対し相争うのである。昨日の友は今日の敵となり、同胞同士、身内同士の殺し合いが起こる。そのような内戦の勃発によって、それまで隠蔽され公的な場から排除されていた剥き出しの生は一挙に公的に政治化され、また逆にポリスに固有であった法的な秩序圏は血族的な親愛圏のただ中へと地すべりの的なだれ込んでくるのである。

4. こうしたフィリアとスタシスの絡み合いを当時の市民たち(そして哲学者たち)はどのように捉え、またどうやって乗り越えていったのであろうか。テロに血塗られた現代世界に生きる私たちにとっても、それは他人事ではないまさに喫緊の問いであるように思われる。とり

わけ、2・3の場面で考察されるべき（ポリスに固有の）事柄が1の（人間存在に固有の）場面へと再び問い戻されることによって、一体どのような新しい問いの地平が開かれるのだろうか。今回、私が考えたいのは、まさにそうした問いである。

\*

## 「ロゴスをもつ生き物」の根源的意味

森 一郎（東京女子大助教授）

古代以来、人間は「ロゴスをもつ生き物（zoon logon echon）」と解されてきたといわれる。この人間観をわれわれはどう理解すべきか。人間が人間的であるゆえんの「ロゴス」とは何か。なるほど、一つの有望な答えは「ことば」である。だが、ギリシア人にとってのロゴスの意味を、言語一般と等置して済ますわけにはいかない。アリストテレスは「ロゴスをもつ」という人間規定を、同時代人に共有されていたもう一つの人間観「ポリスの生き物（zoon politikon）」との連関で取り上げている。ポリスという公的な現われの空間が、強い意味での言論空間であったことは、「ロゴスとポリス」の緊密な結びつきを示している。では、さらにこう問おう。そういう「ポリスの言論」とはそもそも何を意味するのか。

『人間の条件』第四節でアーレントは、「社会的動物」と区別される「政治的動物」という観念のギリシア的起源へと遡るさい、「ロゴスをもつ生き物」の根源的意味に迫ろうとしている。それによると、言論とは古代人にとって行為の等価物であったという。何かをされたら、相手に 同じ行為をそのまま与え返すのではなく、言葉でやり返すというのが、人間ならではの反応であり、それゆえ、暴力を受けた者が同じ暴力を以って無言で相手に「応答」するのはみっともない、と考えられていたという。そこで彼らは、暴力でなくあくまで言論で万事を決める人工空間を築き、そのアリーナのなかで言論の見事さを競った。これが「ロゴスをもつ生き物」の元来の意味だったというのである。

アーレントの議論には、ロゴスの営みを「語り返し（entsprechen, respond）」という基本形において捉える見方が窺える。復讐の代替物という原初的機能において見出されるロゴスには、合理主義とは異なる威力と魅力があり、それと同時に危なっかしさがある。史上最もお喋りな民族の真似はそうやすやすとはできないと、肝に銘じておくべきだろう。

\*

## ソクラテスと青年たちのドラマ フーコーの「主体の解釈学」を手がかりに

塩川千夏（成蹊高校教諭）

私の発表としては、晩年のフーコーが「主体の解釈学」という標題のもと、ギリシャ・ローマの哲学的テキストから読み取った自己形成の技法の系譜のうち、特に『対話篇』におけるソクラテスの言動の、青年たちに対するパフォーマンスな効果に焦点をあてて、お話したいと思います。しかし私は古代哲学について明らかに素人であるため、どういう問題意識を背景にこのお話をするか、この場を借りて説明した方がよいでしょう。私は現在、中高一貫校に勤務しているのですが、生徒らの話の仕方に、おやと思わされることがしばしばあります。建前と本音を使い分け、仲間の中で「浮く」ことや、対立に至ることを回避する生徒たち。そこで思

い起こされるのが、阿部謹也氏が「世間」という概念を使って分析している、日本の人々の暗黙の規範をなす空間です。現代人も大勢に従い、突出した意見など言わぬよう規制されているところをみれば、あいかかわらず「世間」の中に生きているのではないか。また学校は、自由な議論による社会形成を生徒に説きつつ、こどもが「世間」に適應できるようにも腐心する点で、二重の規範を課しているのではないか。彼の問いかけは、教員にとっては、耳のいたいものです。彼自身は歴史家として、「世間」の言説の歴史的 분석をしているのですが、そこで一つの課題となるのが、西洋の個人の歴史をなぞるのではない仕方で、世間から自立した主体の可能性を探ることです。それは単に意識の問題に留まらず、新たな関係を形成していく言語を通して具体化されるべきものでしょう。これは、我々の教育現場にとっても切実な課題であり、議論の背景は大きく異なりますが、私が晩年のフーコーに関心をもつにいたったきっかけでもあるのです。フーコーは、西洋近代を遙かにさかのぼって古代のテキストから、近代の権力空間におけるのとは異なる主体の可能性を示そうとしました。それは「パレーシア」(自由な語り)という言語実践の倫理とかかわっています。古代を読みつつ、現代を考える彼の読解姿勢に学ぶところは多いでしょう。

## 講演要旨

学知の根拠・意義・目標      フィヒテにおける学者論の発展

クラウス・リーゼンフーバー (本学哲学科教授)

ドイツ観念論において、知識そのものの反省と展開は、思弁的な形で論じられるだけではなく、知識と生活の関係、また当時のドイツ大学の刷新運動に伴って学問的研究の方法と目的が根本的に再考察された。フィヒテは、その前期・中期・後期(1794・1805・1811年)においてイエーナ・エルランゲン・ベルリン大学で行った「学者論」講義において、学知の獲得と伝達の根拠と目標を一般向けの演説で、しかも体系的な知識観を背景に議論し、学問の人間論的位置づけ、学者の身分と課題、大学の役割を解明しようとした。これらの講義は、フィヒテ哲学の中心である『知識学』への導入として、その前提をなす哲学入門でありながら、フィヒテの学問理解の全体像を明確に描いている。そこで特に人間本性と生活における哲学の起源、文化の発展の原動力としての学知、知識と社会における実践とのつながり、人間性の完成を目指す学問の目標が注目される。さらに、経験的知識と理念による知的直観の結合、純粹哲学とその応用の問題、学者のエトスと社会的責任を眼目することによって、哲学による一般社会への貢献が明らかにされる。この三つの講義における学知概念の深化を初期・中期・後期を通して辿ることによって、フィヒテ哲学の一貫性と発展の諸段階が示されると同時に、この思想史的関心を超えて、現代において困難な状況に瀕している学問研究の理念と大学の課題に光が当てられる可能性を探ってみたい。

## 研究発表要旨

### 清沢満之『純正哲学』における「現実性」理解と関係論 ロツツェ『形而上学』の仏教哲学的解釈

角田佑一（本学博士後期課程）

本発表のテーマは清沢満之（1863 - 1903）の最初期の著作『純正哲学』（明治21年）において展開される清沢独自の仏教哲学の形成をロツツェ『形而上学』の受容の問題を踏まえながら、とりわけ「現実性」の理解と関係論の解釈に着目しつつ、明らかにしてゆきたい。

清沢の『純正哲学』はロツツェの『形而上学』の「存在論」をもとにして書かれた著作であり、この中で清沢は、ロツツェから関係存在を重点におく見方を汲み取っている。ただし、清沢はロツツェの関係論を華厳仏教における「事々無碍」の視野のもとに解釈し、再生しようと試みている。

第一に満之の「現実性」理解の問題に取り組みたい。ロツツェの『形而上学』において、存在、生起、存立は「現実性」(Wirklichkeit)の3つの様式としてとらえられ、この三者は互いに還元不可能なものである。彼は『形而上学』において事物及び、事物間の連関について何を考えねばならないのかを根本的に問い、「現実性」の内的連関を解明することを『形而上学』の主題としている。

これに対して、満之は「現実性」を「変化ある実体」と解釈して、「事々物々の生滅起伏」という事態のうちに、法則的關係を見出すことを目指している。『純正哲学』緒論においては、「純正哲学は変化ある実体を研究す。変化とは事々物々の生滅、起伏、隠顕、出没するを云い、実体とは宇宙間に顕現羅列する万有を云う。細言すれば、無にあらざりて有なる物、起らざるにあらざりて起る事、存在せざるにあらざりて実存する關係、此の三者は皆な実にして虚にあらず」(清沢満之全集第3巻、4頁)と言われている。満之の場合、「現実性」の諸形式として存在、生起、存立を捉えるのではなく、存在、生起、存立は「実体」が変化する種々のあり方と解釈している。

第二には事物の変化の「法則」、「規則」の問題を扱いたい。ロツツェの『形而上学』において、存在するものの「Was(内容)」は、認識し得ないものであるが、存在するものの「Was(内容)」をわれわれが表象する所に「法則」(Gesetz)が成立する。これに対して、清沢は「事物の本体」が不可思議であるという事態を、事物が自ら不変の本体を持たないことであると仏教的に解釈して、事物が周囲の状況に影響されて、「或る事情に合えば甲となり、他の事情にあえば丙となる」というように、「定規定則」にしたがって種々に変転する、と考えている。満之によれば、事物の本体とは事物の変化の「定規定則」であり、常に一定の範囲内において変化するものであるとされる。第三には「転化」の問題を取り扱う。ロツツェによれば、事物は 1、 2、 3...無数に続く形式序列に従って種々に変ずる。ただ、清沢の場合、事物甲が一定の系列のうちにまとまって、甲1、甲2、...と変化するのではなく、周囲の個物にしたがって甲がAになり、Bなどに変化すると述べられるにとどまっている。第四に清沢の「万物一体」論におけるロツツェの影響について取り扱いたい。ロツツェの『形而上学』においては、個物 a、 b、 c はひとつの無限なる本質 M の部分、変容、流出である。M において という変

化は ...という補足的变化を伴い、Mの内的均衡が保持される。これを受けて、満之もロツェから影響を受けて、『純正哲学』第1章第6節「万物一体」において、万物は包括的な一本体の部分としてあり、その一本体が自らの自己同一性を保持するために、内部の一つの事物が変化すると、他の事物をも変化せしめる。そこに事物相互の影響関係が成立するという華嚴仏教の「事々無碍」を背景とした「万物一体」論を作り上げている。

\*

ホワイトヘッド『過程と実在』の構造 把握理論を中心として

駒沢幸三郎（本学博士後期課程）

『過程と実在』の本論は、思弁哲学であり、宇宙論であり、世界観である。存在論であり、認識論である。実在を過程（process）として捉えた世界観である。「実在」の対概念としての「潜在」は世界に充滿しており、この潜在可能態から人間が自分達に現実態として好ましいものを選択し、創造的に実現している面がある。

ホワイトヘッド哲学には「過程の哲学」、「有機体の哲学」、「プロセス神学」等々、種々の呼び名があるが、先ずは彼の「構想の輪郭」を以下『過程と実在』に沿って記述してみることにする。そしてその後、論点を「把握理論」（the theory of prehension）に絞って行きたい。何故ならば、本論の中心概念である actual entities の発生、発展、消滅つまり concrescence 生成過程（合生または現成）は順応的物的感受（積極的把握）から始まり、複合比較の感受にいたり、充足（満足）して客体化し、不滅の存在となって新しい actual entities に把握されて行くという循環過程の全ての過程に関わっているのがこの把握なのであるからである。

以下要約すると、

1. 「実在は過程である」と言っている。従来のアリストテレスに始まる実体概念を拒否して、実在するものは現成（concrecence）と移行（transition）の運動としての過程であるとしている。「形態論的記述が力動的過程の記述によって取って替えられている」。過程の哲学であると同時に、有機体の哲学でもある。
2. 「有機体の哲学では、究極的なものは『創造力』と呼ばれており、神はこの創造性の原初的非時間的な偶有事である」と言っている。
3. 筆者も、存在の本性は潜勢態であり、人間がこの潜勢態より把握するものが現実態なのである、と考えている。潜勢態、現実態なる概念は人間が考えたものにすぎない。ホワイトヘッドは人間の代わりに現成（concrecence）という概念を使用しているのであるが、勿論結合態（nexus）としての人間も含まれる。つまり、存在には潜勢態としての存在と、現実態としての存在とがあり、しかも潜勢態にも real な潜勢態と、pure な潜勢態（eternal object）とがある。

相依性原理（相対性原理）について

ホワイトヘッドは説明の範疇の中で、次のように言っている。「多くの実質の、一つの現実態へのリアルな合生における要素であるための潜勢態は、現実的と非現実的とを問わず、全ての実質に付属する一つの一般的形而上学的性格であり、その宇宙における全ての項目は、それぞれの合生のうちに含まれているということ、換言すれば、存在の本性には、それが全ての生

成にとって潜勢的なものである、ということが属している。これが『相対性原理』である。』  
言い換えれば、「究極的実在は、離接性と個別性により限定されたものとして相互的に超越的でありながら、同時に相互内在的なのである」。

#### 存在論的原理について

「生成の過程が、任意の特殊な事例において従う全ての条件は、その根拠を、その合生の現実世界の内にある或る現実的実質（活動的存在）の性格の内か、それとも合生の過程にある主体の性格の内かに持っている。説明のこの範疇は『存在論的原理』と呼ばれる。それはまた『作用因並びに目的因の原理』とも呼ばれ得る」。言い換えれば、「全てのものは、実際現実的に何処かに在り、可能的には（或いは潜在的には）何処にでも在る」という原理である。

actual entities と eternal objects が延長的連続体（宇宙）における、基本的存在（現実的と潜勢的とを問わず）である。従来の哲学的考察における、唯心論と唯物論との結合を目指した統一理論への試みを、「客体化」および「抱握と合生」という機能を導入することによって、また、主体と客体の相互作用、潜勢態と現実態との相互交替等の相対性（相依性）原理及び存在論的原理を導入することによって、果たしている。